

中山間地域の農業どうなる・どうする

退職してから10年が過ぎようとしている。所有の水田4反余りでその殆どを村の年配者の好意で稲作をしてもらってきた。昔は、水田を借りた側が年貢を支払うのが決まりだったが、当節は年貢を払って水田管理をお願いするような案配である。であるからして、所有者に年貢が払われることはない。稲作のために水田管理がしてもらえればまだいい方で、所有者に耕作意欲がなければ荒地になってしまう。1年も放っておくと草がはびこり湿地帯と化し、やがて草木が伸び放題で手がつけられなくなる。獣の住み家になり、益々荒れてしまい今更どうしようもないと諦めてしまうことになる。

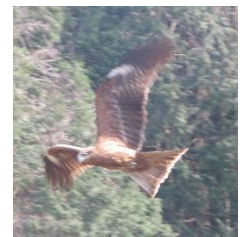


耕作放棄地が目立つ

特に少子高齢化の顕著な中山間地域の米作り（稲作）は、先が見通せないほど危ういのである。機械化に多くの経費がかかり、後継者不足である。水路の老朽化が著しく、水田用の水も潤沢でなく、大雨による災害が多発している。山際の地域故、獣害対策は欠かせない。苗・田植え・稲刈りなどを第三者に頼むと採算があわない。先祖代々の土地を守っていかねばとの思いだけで何とか出来ていても先が見えている。我が家而言えば（二人暮らし）作るより買う方が格段に安上がりである。何とか田んぼが荒れない程度に管理していると言うのが現状である。

営農組合の組織や、有志が集まって共同で稲作を行う、米以外の農産物を栽培する、隣接の市のように企業と提携する等が考えられるが、そんな話はあるそうもない。収益を上げるのは並大抵の事ではない。後継者がいても勤めながらの土・日曜農業では、心細い限りである。数年先に耕作放棄地だらけが当たり前の光景とならない為の手立てはあるのか。

春間近の3月の下旬にトラクターで田畑の耕運を行った。毎年出逢うのは「蛙」である。迷惑そうにのっそりと姿を現す。事故に遭う者も少なくない。この時期は「啓蟄」（今年3月5日が啓蟄の日である・この



とんび



後追いカラス

日から3月20日（春分の日）迄の期間を指している：啓は開放するという意味、蟄は虫などが土の中に隠れて閉じこもると言う意味）と呼ばれて、冬ごもりしていた虫たちが土の中から出てくる頃である。

他にも常連がいる。「カラス」と「とんび」である。カラスは賢くて敏感である。カメラを向けるだけでも反応する。とんびは、高い所からでも獲物がよく見える。顔の真横を飛びぬけてくることもありびっくりする。

